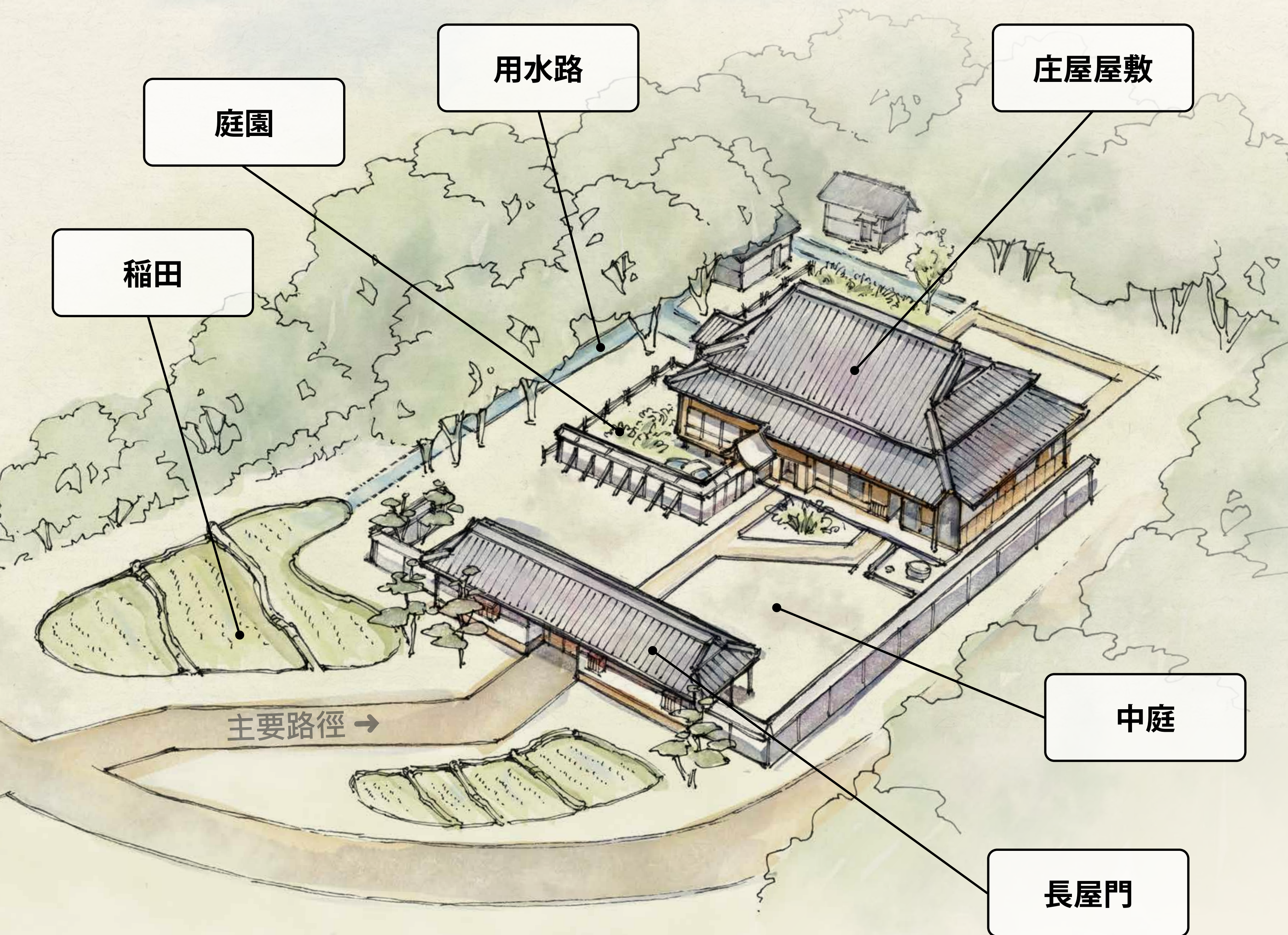


JAPANESE HERITAGE SHŌYA HOUSE

日本の伝統的な庄屋の屋敷



庄屋屋敷へようこそ。これは、日本の丸亀にある村の庄屋が約300年にわたって居住した建物です。

この屋敷は、江戸時代(1603年~1867年)当時、村の中心的存在でした。地元の農民は、税の支払い、祭りや宗教的儀式などの際に庄屋を訪れました。

現在、この建物は再び田圃と庭園に囲まれており、私たちに自然と共に持続可能な暮らしをすることの大切さを思い出させてくれます。

「The Huntington」は、多くの建築分野の専門家の協力のもと、この庄屋屋敷を丸亀から米国のサン・マリノに移築しました。



このインスタレーションの教育コンテンツは、フランク&トシエ・モッシャー夫妻とジョン・ブロックウェイ・ハンティントン財団の寛大な支援を受けています。

農業のライフサイクル

人間も含め、自然にあるすべてのものはつながっています。産業革命以前の日本では、農民が土壌の豊かさと生産性を高めつつ環境への影響を減らす方法を見つけました。そのうちのいくつかは、今でも農地の維持に役立っています。

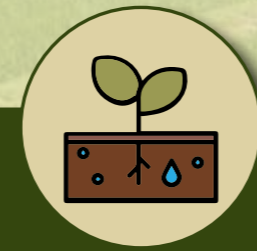
米の栽培

昔、米は日本経済の基盤でした。庄屋はそれぞれの農家が収穫した米の一部を回収し、藩に税として納めていました。



土地の開拓

土壌の豊かさは植物の栽培に欠かせません。日本の農民は、砂地や沼地を肥沃な農地に変える方法をいくつか開発しました。



被覆作物

作物によっては、植えられた後に収穫されないものがあります。そうした作物は、土を覆って浸食や水の流出を防ぎ、土を豊かにする役割を担います。



堆肥化

微生物やその他の生物は、食物や植物を分解し、栄養素を土に還元してくれます。



輪作

作物の収穫が終わるたびに、その畑に種類の異なる作物を植える農法です。そうすることで、害虫を減らし、土を休ませ、栄養が損なわれるのを防ぎます。

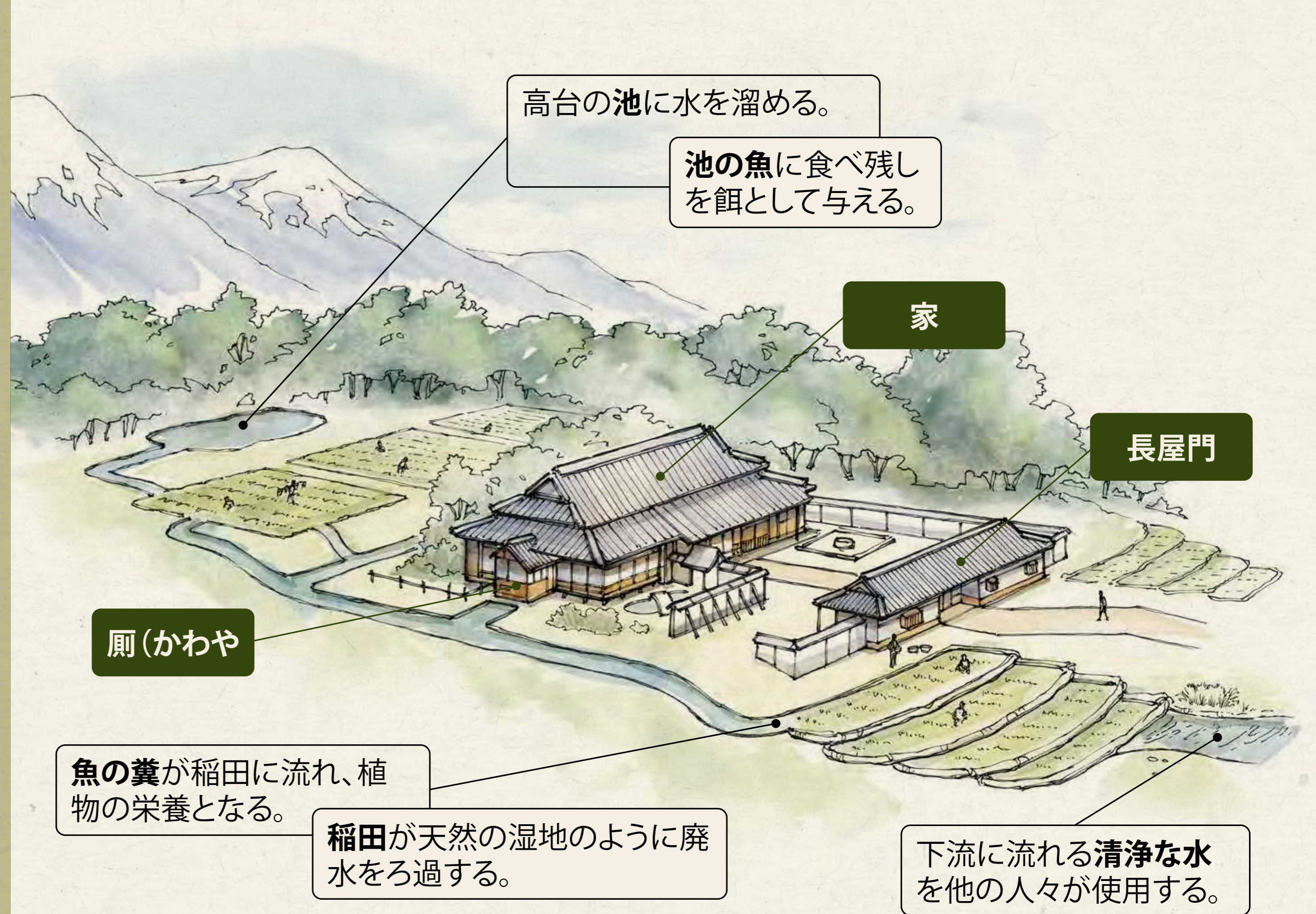
効率的なエコシステム

日本の山々から流れる雨水と雪解け水は、農地や家庭の水源となりました。農民は水を清浄に保つ仕組みと、食料廃棄物を再利用してごみを減らす仕組みを編み出しました。

廃棄物を再利用する

日本の農民は、人糞を堆肥化して再利用していました。人糞には、植物が育つために必要な栄養と有益な微生物が含まれています。

庄屋を訪ねる人々は、邸宅内で回廊を通じて他の部屋からつながっている、この部分にある厠(かわや)を使っていました。



公室

庄屋屋敷の正面部分は、仕事に使われました。庄屋はこれらの部屋で、村の務めを遂行したり、役人と面会したり、宗教的儀式や祝祭を催したりしていました。



屋敷の突き当たりにある**表屋敷**からは、**庭園**を見渡せるようになっています。

襖を使って一部屋を複数の小部屋に分けることができ、襖を開け放てば広い一間として使えるようになります。

仏壇は宗教的儀式の中心となる存在でした。

庄屋は税や家賃の支払い、情報の記録、両替などの手続きを帳場で行いました。

玄関は、役人や要人をもてなす表座敷へと続いています。

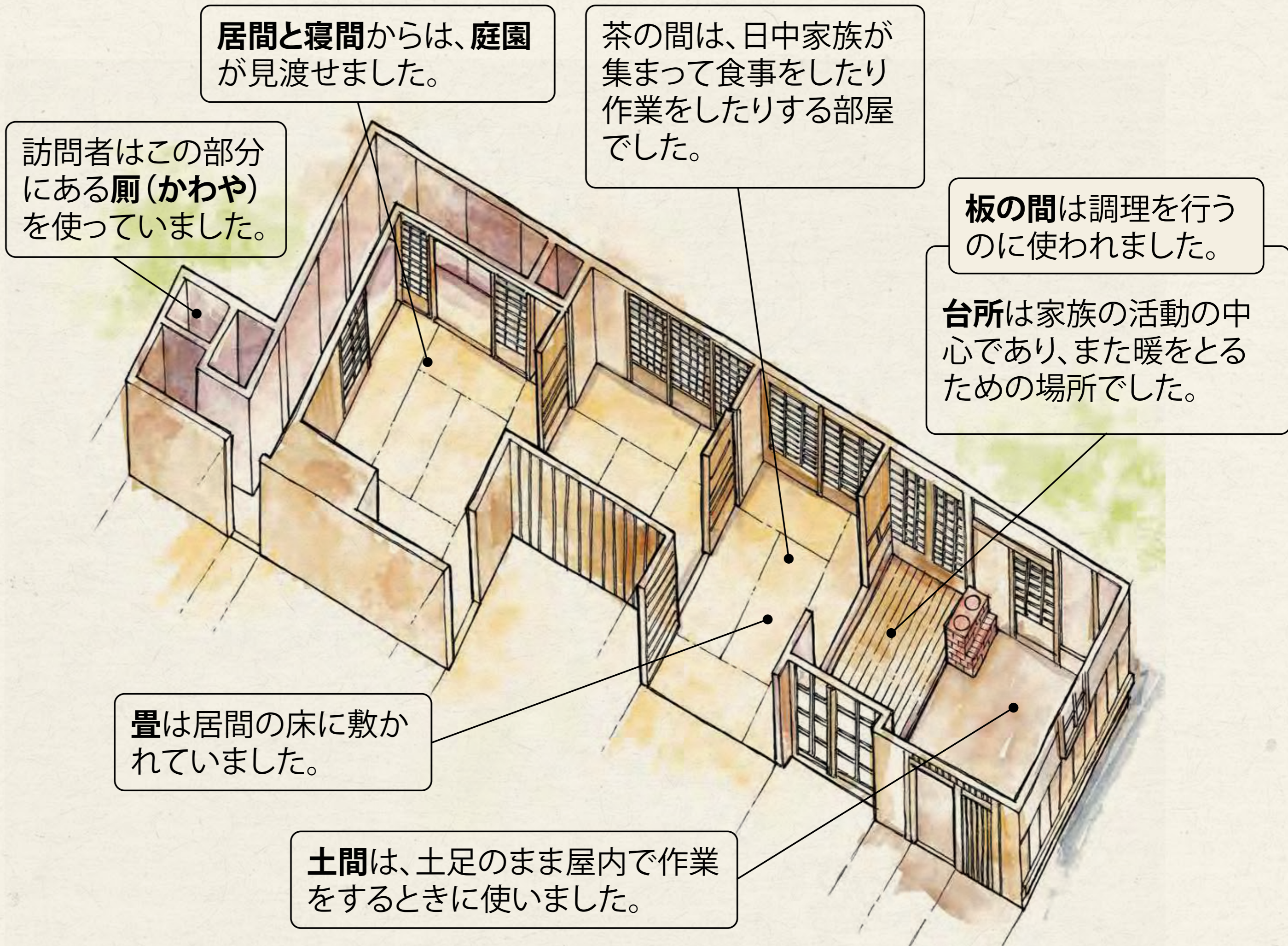
土間は作業場として使用されていました。

家族用の空間

庄屋とその家族が暮らした居住空間は、邸宅の後方に位置しています。それぞれの部屋が複数の機能を果たしており、襖を使って空間を分けたりつなげたりしていました。日本家屋の柔軟な構造は、小さな空間に家族が一緒に住むためのものでした。

世代による変化

横井家はこの邸宅に何世代にもわたり住んでいました。ガラス製の防風ドアやレンガ造りの暖炉は、邸宅を現代化するために100年以上前に付け加えられたものです。台所は家族の活動の中心であり、また暖をとるための場所でした。



屋敷を守る長屋門

庄屋の家は、強固な壁に囲まれていました。ほとんどの村民は門の外に住んでいましたが、村の集まりや、庄屋との仕事関係の話し合いなどのために庄屋の家を訪ねていました。門番が長屋門に取り付けられた部屋の一つに住み、使用人の住居や馬小屋は他の場所に配置されていました。

屋敷をしっかり守る設計

村が攻撃された場合に備え、夜になると木製の門に鍵をかけて居住者を守りました。長屋門の土塀自体も、風雨や火災から守る設計が施されています。

屋根瓦は雨や火の粉を防ぎます。

滑らかにならした木材は、水をはじきます。



木製の骨組みに泥と漆喰を塗り重ねています。



漆喰を用いた接合部は、雨や火災から内部を守る構造となっています。

邸宅への入口

庄屋は、この建物で当地のあらゆる統治行為を行いました。役人は、公式の訪問の際には玄関を使用しました。農民や商人、職人は、今日私たちが使用している通用口から出入りしていました。

集いの場

あらゆる社会階級の人々がこの邸宅を訪れました。江戸時代(1603年～1867年)、日本の階級社会では誰もがそれぞれの役割を担っていました。

侍

武士と行政官

農民

原料を生産

職人

原料で商品を製造

商人

商品を販売

庄屋は税の徴収、村民の調査、村の管理に関わるその他の事柄を監督していました。庄屋の地位は侍より低いものでしたが、多くの場合、侍より裕福でした。侍は自分の土地を持っていないのに対し、庄屋は土地を所有できたからです。

宗教指導者

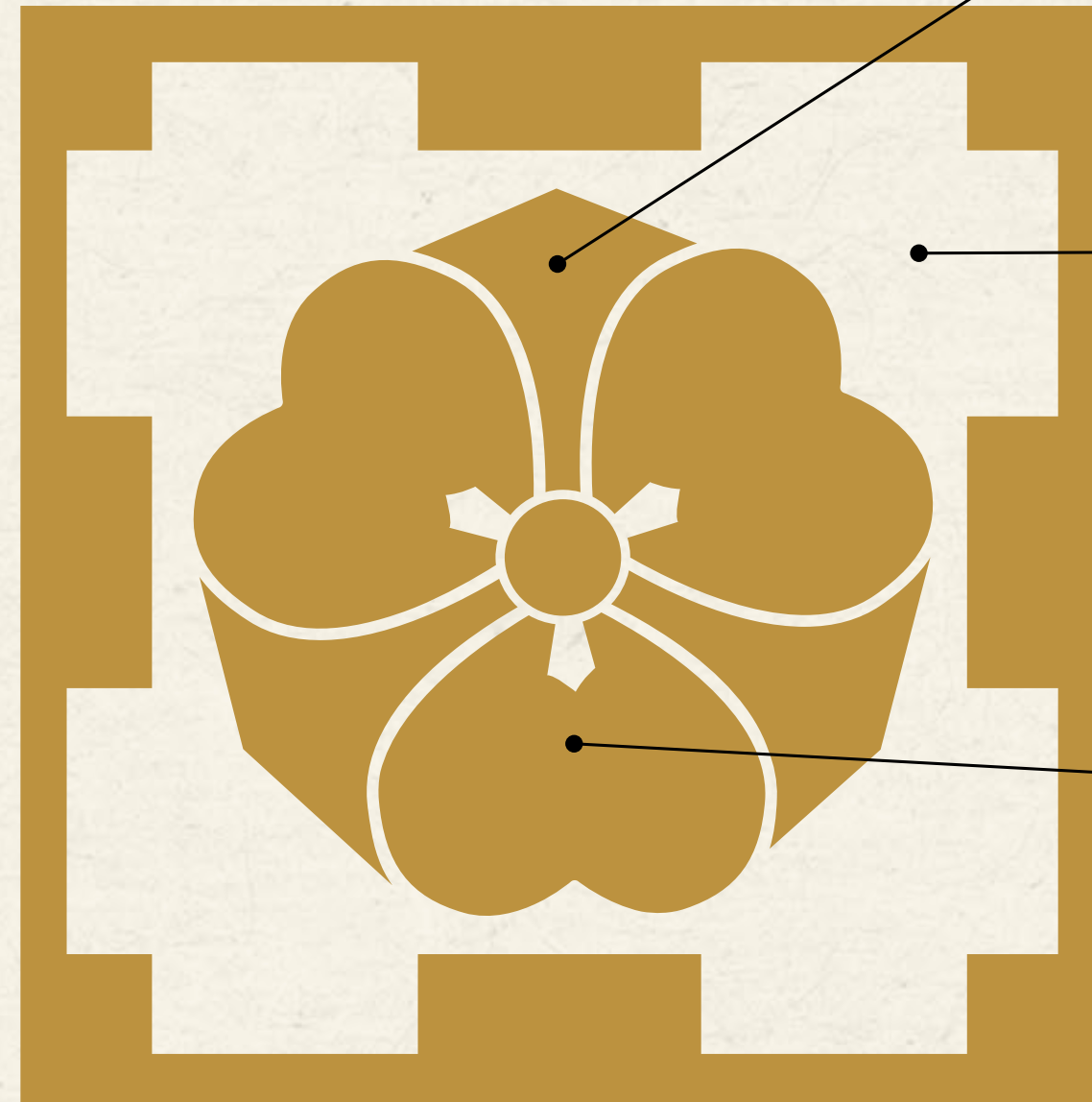
士農工商の外側に位置

家紋

頭上の屋根瓦に施された紋様は、象徴的な意味を持ちます。これは、この邸宅に代々住んでいた横井家の家紋です。横井家は、庄屋として、他の農民よりも高い地位にありました。帯刀を許され、名字と家紋を持っていました。これらは当時、多くの人ができなかったことです。

横井家

横井家の祖先は、豊臣秀吉(1598年没)の天下統一において武士として仕えた横井元正(1585年没)にさかのぼります。豊臣勢力は1600年に討伐されましたが、横井家はその教育と家系を背景に庄屋となりました。



剣先
軍事力の象徴

井戸を表す「井」の文字
苗字「横井」の一部

片喰(カタバミ)
生命力と一族繁栄の象徴



カタバミは、繁殖力が強く、取り除くのが難しい植物です。

屋根の隅には、横井家の家紋が配されています。

庭を覗いてみましょう。

現代の日本語で家を意味する時によく使われる「家庭」という言葉は、「家」と「庭」という2つの語が組み合わせられています。

家庭 = 家 + 庭

こちらの木柱を触ってみましょう。

大工は手作業で木材を削り、水をはじく滑らかな表面を作り上げました。



卓越した職人技

木材は風通しの良い生きた素材で、湿気によって伸びたり縮んだりします。また、風雨にさらされて劣化し、地震ではよく揺れます。

日本の大工は、再利用が可能な資源を長年扱ってきました。その技は、「もったいない」の精神を体現するものです。これは、ものを減らし、修理し、再利用して廃棄物を減らすという、今の私たちにも馴染みある概念です。

大工は家を建てる際、以下のような道具を使用しました。**下にある引き出しを開けてみましょう。**

釘を使わない建築

木材を釘なしで組み合わせる建築方法では、個々の部品が劣化した際に交換することができます。交換後、古い木材は他の用途に再利用されます。釘なしの接合部分はより自由度が高く、地震の揺れに合わせて揺れるため、地震による損傷が少なく済みます。

頭上にある梁をご覧ください。

この邸宅を建てた大工たちは、木の幹全体を使用しました。自然な湾曲をうまく使い、ごみも減らせる方法です。

切る

のこぎりと手斧で大きな木材を切って形作りしました。

形を整える

鉋(かんな)で木材の表面を滑らかに整えて形作りしました。

鑿(のみ)で木片を彫って継手を作りました。

固定する

鋸(かすがい)で梁などの構造材を固定しました。

釘でタイルや床板などの仕上げ部材を固定しました。